

XenosagaI・II - 第六話 光芒 - Glanz -

ハマー：グノーシス郡、概算で 30000 以上！ お、追ってくるっす！
マシューズ：全速だ、まくれ！
トニー：アイサー！
アレン：に、逃げ切れるんですか！？
ジギー：この速度差では、難しいかもしれんなー
アレン：そんなあっ！
シオン：KOS-MOS、ヒルベルトエフェクト広域発動！
KOS-MOS：了解しました。ヒルベルトエフェクト発動します。
アレン：いくらヒルベルトを使ったところで、倒しきれないですよぉー
ハマー：左舷後方から高速のグノーシスが 1 体、接近中！ 捕まるっす〜〜っ！
シオン：ああっ！

光 - Glanz - 芒

モモ：きゃあっ！
マシューズ：なにが起こった！
ハマー：4 時方向からレーザー砲撃！ グノーシスが消滅したっす！
後方から大型艦接近！ 艦籍はー
マシューズ：デュランダルクっ！
ハマー：助かったあっ！

デュランダル 

???：へえ、やっぱりヒルベルトエフェクトかかっているな。いったい、何者だ――？

メリィ：ちび様、船籍確認！ やっぱりエルザやで！

Jr.：――ったく、グノーシスが暴れてると思って来てみりゃあ、こんなところで、なにしてやがんだ。

だいたい、なんでヒルベルトなんかエルザに積んでるんだ？

まあいい。全砲門、目標グノーシス！ エルザの退路を確保しつつ、殲滅しろ！

メリィ：了解！ レーザー砲群、10時を指向しつつ、撃ち方はじめ！

エルザ 

ジギー：戦闘が始まったようだな。

モモ：大丈夫でしょうか、かなりの数でしたけど――

シオン：連邦軍一個艦隊を壊滅させた敵よ。戦うより、逃げた方が賢明だわ。

デュランダル 

メリィ：あかん、こらきりないで！ ちび様、どないしますのん？

Jr.：補給前だったかな。ちっ、U-TIC 機関なんぞと戦闘すんじゃないかったぜ。

でなけりゃ、こんな連中――

メリィ：ちび様、本艦5時方向に敵集団転移。全域包囲されつつあります。

Jr.：逃がさねえってか、集団で連携とはね。これまでになかったタイプだぜ。

ゲートジャンプしても、はたしてまけるかどうか――

メリィ：ちび様、エルザが新手に追われとる！ このままじゃ――！

エルザ 

ハマー：わわわっ、グノーシス郡の先頭と距離 20000！ やばいっすよ！
マシューズ：トニー！ 振り切れるか！？
トニー：——無理っぽいな。向こうの方が、速度が上だ。
マシューズ：くそう、デュランダルもよくやってくれてるが、数が多すぎる。どうすりゃいい——
ハマー：あれ、17 番ハッチが開いてるっすよ！ 誰か残ってたんすか！？
シオン：——！ KOS-MOS だわ、あの子！
ハマー：いました、昇降機に乗ってるっす。モニター出しまっす！
シオン：KOS-MOS！ KOS-MOS、なにやってるの、戻ってきなさい！
あれだけの数、あなたには倒せないわ。そういう機能は搭載されてないのよ！
KOS-MOS『シオン——傷みは、私を満たしてくれますか——』
シオン：なに、聞こえないわ！
ハマー：空気が薄いから、音拾えてないんっすよ！

デュランダル

メリィ：ちび様、ゾハルエミュレーターが活性化しています。
Jr.：なんだって！ 活動阻止装置[アトラクト・インヒビター]は！
百式：活動阻止装置出力 300%、ゾハルエミュレーターの波動を抑えきれません！
Jr.：なんてこった——動き出しやがった。
シェリィ：中央電脳[マザーフレーム]ピエタに侵入警報。バリエーションに置換現象が見られます。
Jr.：” ママ” にか！ どこからだ？
百式：感染[トランスフェクション]経路を走査[スキャン]中——
——経路特定、隔離格納庫からです！
Jr.：隔離格納庫——まさかゾハルか！
百式：はい、ゾハルに対して外部からのリクエストが発生しています。
シェリィ：パラダイム汚染進行中。このままでは中央電脳を乗っ取られます。
Jr.：隔離格納庫との主回線を切れ！ 活動阻止装置、サブ回線で独立稼働させろ！
シェリィ：主回線 パージ、シグナル伝達系封鎖！
Jr.：いったい、なにが起きてやがるんだ。

エルザ 🍷

シオン：KOS-MOS——KOS-MOS っ！

え——なに！？

アレン：グノーシスを消去してる！？ いや違う——これは！

シオン：吸収——してるの？

KOS-MOS： —————

マッシューズ： —————

——なんだ、楽勝じゃねぇか。

アレン：主任——

シオン：いまの——幻覚なんかじゃないわよね。

アレン：ええ、グノーシスを吸収しているようでした——

シオン：私の知らない兵装があるなんて——ううん、兵装なんかじゃないわ、あれは——

アレン：ありえない話ですよ——

マッシューズ：あるとかなないとか、いったいなんの話だ。グノーシスは倒したんじゃないのか？

ハマー：あのお——船長、さっきからちび旦那が通信を入れてきてるっすけど——

マッシューズ：おう、つないでくれ。

アレン：ちび旦那？

Jr.『お、やっとながつながったな。』

マッシューズ：いやぁ、どうもすいません。おかげで助かりやした。

Jr.『なんでお前らが、グノーシスに追われてるんだよ？』

マッシューズ：それがですね、とんだ災難にあっちまいましてね——

シオン：（—————

KOS-MOS、そろそろ船内に戻ってきたかしら——

私の知らない KOS-MOS——

——ケビン先輩、これがあなたの望んでいたことなんですか——

KOS-MOS の本当の姿なんですか――)

デュランダル 

Jr.: ――よし、了解した。修理はこっちでやるから、はやくドックに入ってきたな。

マッシューズ『いやあ、助かります。それじゃ、後でそっちに顔出しますわ。』

Jr.: おう!

シェリィ: ――ちび様、よろしいですか?

Jr.: なんだ、シェリィ?

シェリィ: いま、左舷に観測されているスペクトルなのですが――

Jr.: ! ―― こいつは――

ゾハルエミュレーター!

――――――

活動阻止装置、用意してあったはずだな。

シェリィ: ――はい、常に不測の事態は想定されていましたから。

Jr.: よし、メリィ、回収はじめてくれ。くれぐれも――

メリィ: ” 呑み込まれたり ” しないように、気をつけさせるわ。

Jr.: ――ああ、頼む。

――

シオン: みんなブリッジに向かったみたいね――

ブリッジ

Jr.: おう、やっと来たな。

ケイオス: ありがとう、助かったよ。

Jr.: 後でくわしく事情を聞かせてもらうぜ。ったく、なにがどうなってんだか――

中央電腦[ママ]が風邪ひいちゃったんで、調査も分析もしばらくはお預けだ。

ケイオス: 災難だったね。

Jr.: へへ、よく言うぜ!

アレン：知り合いなんですか？

マッシューズ：ボスだよ、俺たちの上得意さん。

あー、ちび旦那。ミルチア行きのお客の件ですけどね　ちょっくら増えちゃったんでさ。

Jr.：どうやら、わけありな客のようだな。ま、それよりエルザの修理が先だろ。

ファウンダーションで直していけよ。さっき、ドックから連絡があったが、ありゃ応急修理じゃもたないぜ。

シオン：ファウンダーションーって、クーカイ・ファウンダーション？

『フォース・今年の急成長法人』トップ10入りの？　じゃあ、あなたがー

Jr.：いやあ、片手間に商売始めたら、なんか儲かっちゃってさ。

アレン：（ーだめですよ、主任。こんな連中と関わっちゃ）

Jr.：おいおい、聞こえてんぞ、に一ちゃん。宇宙空間[そと]に置き去りにしてってもいいんだぜ。

アレン：はっ、はい、すみません！

マッシューズ：いっそのこと、置いていっちまいやしょうや、ちび旦那。

こいつ、グチグチと小うるさいのなんのってー

アレン：ちょっと船長まで！

ケイオスくん、助けてよお。

ケイオス：僕に決定権はないからなあ。ここは二人の判断に任せるよ。

Jr.：なら、やっぱ置いてくか。

アレン：そ、そんなあ〜っ！

Jr.：なに、真顔でビビってんだよ。冗談だよ、冗談ー

シオン：――――

Jr.：どうした、心配事か？

シオン：えっ、あ、いえ、なんでもないんです。シオン・ウヅキです。よろしくーえっとー

Jr.：Jr.だ、ガイナン・クーカイ・Jr.。本名は別にあるけど、諸事情あって、いまはそういうことにしている。

ーそっちはモモ、だな。

モモ：はい、モモのこと、ご存じなんですか？

Jr.：ああ、ユリ・ミズラヒ博士には昔から世話になっててね。

（そして、サクラからも頼まれてるんだぜー）

モモ：え？

Jr.：いや、なんでもない。

マッシューズ：嬢ちゃんと旦那を第二ミルチアへ送り届けよう、俺らに仕事をまわしてくれたのは、

このちび旦那なんだぜ。

モモ：それで――ありがとうございます！

ジギー：おかげで助かった。

Jr.：いや、まあ――ほんとはもちっと頼りになる船つけてやりたかったんだけどな。

今回は安心よりスピードだと思ってさ。

トニー：いやあ、照れるなあ。

マッシュューズ：バカ野郎、ほめられてねえ！

トニー：え、そうなの？

Jr.：まあ、積もる話は、途中でもできるとして――

シェリイ、予定変更。ファウンデーションへ帰投する。

シェリイ：了解しました。これより、ファウンデーションへ帰投します。

回頭完了。これより、ゲートインします。

Jr.：――あとガイナンに伝えといてくれ。”最後の贋作を確保”ってな。

シェリイ：――わかりました。

――

アルベド：――

連邦軍艦隊を沈めた災厄は、クーカイ・ファウンデーションの手に収まったか。

貴様らが、その重荷に耐えられるのか、見物だな――くっくくくく――

――

シオン：うーん――

やっぱり、寝心地よかったなあ。軍艦やライフボット、貨客船とは大違いね。

アレン：僕です、主任――もう起きてらっしゃいます？

シオン：どうぞ、ロック外したわよ。

アレン：いやあ、主任。グッドニュースですよ！

この艦、クーカイ・ファウンデーション到着後、第二ミルチアまで行ってくれるんだそうです。

シオン：第二ミルチアまで――わざわざ？

アレン：向こうに用事ができたそうです。

シオン：（用事――？ 昨日、回収していた、あのゾハルと関係あるのかしら――）

アレン： まあ、エルザの修理に時間がかかるだとかで、船長は機嫌悪いですけどー
モモちゃんとジギーさんを送る必要はあるらしいですし、そのついでじゃないですか？

シオン： ー

アレン： どうかしました？

シオン： ーうん、おのおの事情はあるんだろうけど、みんながみんなミルチアってのー
ちょっと気持ち悪くない？

アレン： そうですかあ？

単なる偶然でしょ！ 僕は運賃が省けて良かったと思いますけどー
貨客船[エルザ]とは桁違いにリッチな設備だし、万が一グノーシスに遭遇しても、この艦の装備ならー
それにほら、この個室！ ジェットバスやミニバーまでついてるんですもんねえー
ーって、どうしたんです？ 肩を落としてー

シオン： ー

ーなんでもないわ。あなたの現金さが羨ましいだけよ。

アレン： あ、そうそう。そんな話より、ちゃんと目的があって来たんですよ。

シオン： 目的？

アレン： ええ、U.M.N. 端末を借りる手配をしておいたんです。

シオン： そっか、まだ曙光[本社]に連絡、いれてなかったわねー

アレン： ええ、それどころじゃありませんでしたからね。

シオン： さすがアレンくん、気がきくわね。

アレン： そりゃもう！ 場所はブリッジエリアです。じゃ、行きましょう。

シオン： OK！ ブリッジエリアね。

ブリッジエリア

アレン： さあ、この端末を申し込んであります。曙光に連絡しましょう。

ー

Jr.： よう、ちょっといいかな？

モモ： あ、Jr. さん！ どうしたんですか？

Jr.： いや、なにか不自由してないかーと思ってさ。

モモ： ーいえ、なにも。すごく良くしていただいて、ありがとうございます。

Jr.： そっか、ならいいんだ。

——なあ、モモ。

モモ： はい、なんでしょう？

Jr.： シオンたちとは、どういういきさつで同行することになったんだ？

モモ： シオンさんたちが乗り合わせた連邦軍艦隊が、グノーシスに襲われたことはご存じですか？

Jr.： ああ、聞いてるよ。

モモ： 近くを通りかかったエルザが、生存者を救出するために、その現場へ立ち寄ったんです。

Jr.： （艦長の本音は、残骸の中から金目のものを拾い集めるのが目的だったらしいけどな。）

モモ： そこでシオンさんたちのライフボットを回収したんです。

最初は、KOS-MOS さんが自分の目的地へ向かわせようとしてたんですけど——

モモたちと同じ第二ミルチアを目指してるのがわかって、一緒に行くことになったんです。

Jr.： （偶然を発生させたのは、船長たちの物欲だ

誰かの意図が働いてた——ってのは、考えすぎだな）

モモ： あの——どうしたんですか。シオンさんたちになにか？

Jr.： いや、そういうわけじゃねえんだ。身元は調べさせてもらったが、怪しいところはない。

ヴェクターとウチは業務提携もしてるし、いまところは頼りになる味方同士だしな。

モモ： ——

Jr.： まあ、なんらかの後ろ暗い目的があるなら、あんな奴ら、送り込んでこないよな。

特に、アレンって兄ちゃんはや。

モモ： ——ふふ、そうですね。裏表ない人に、モモにも見えます。

Jr.： やっぱ、みんなゾハルに引き寄せられてるってことか——

モモ： え？

Jr.： ——よし決めた！ モモ、ちょっと来てくれ。シオンたちも呼び出そう。

モモ： Jr. ——さん？

Jr.： 見せたいものがあるんだ。

ブリッジエリア

シオン： 冗談でしょ！ ——なによ、これ！

ミュキ『そんなこと言われても～ 私、ただ辞令を伝えてるだけです。』

シオン： だから、その辞令が納得できないって言ってるの！

もういいっ！ あなたじゃ話にならないわ。局長を出して、局長！

ミュキ『は、はい～ ちょ、ちょっと待っててください～い。』

アレン：主任、ちょっと怖いですよ。ミュキちゃん、怯えてたじゃないですか。

なにも怒鳴らなくたってー

シオン：なに言っているの！ これが怒鳴らずにいられること！？

局長『あー、ウヅキくん、無事でよーー』

シオン：局長！ どういうことですか、新しい辞令って！

局長『見ての通りだがー』

シオン：なるほど、私の目の錯覚でなければ転送されてきた書類には、

KOS-MOS は第二種装備受領後に第二ミルチアの二局に引き渡して、

私達には即刻帰投しろーそう書いてあるように見えるんですけど。

局長『だから、見ての通りだとー当初の予定とも合致している。いったいなにが問題なのかね？』

シオン：局長！

局長『頼むよ、ウヅキくん。私だって、キミの気持ちは十分理解しているつもりだ。

それに報告書を見たが、実用上、特に問題となる点はなさそうだしー』

シオン：いいえ！ 全っ然っ、理解していらっしゃいません！

いいですか、勝手に動いてるですよ、あの子！

その原因も特定できていないのに、二局に渡すことなんてできません！ 実戦装備だなんて、危険すぎます。

それにあの子のことは私が一番詳しいって、局長だって、ご存じじゃないですか！

局長『ーふう、ヴォークリンデの一件、戻ってきたトガシくんから聞いたよ。

幸いにして、うちに人的被害はなかったが、かなり危険な状況だったそうじゃないか。

そんな現場に、君たちを残しておけると思うかね？』

シオン：承知の上です。

アレン：（え？ 僕は承知した覚えはー）

局長『しかしだねー』

シオン：局長！

局長『ーーーーー

分かった、負けたよ。上の方はなんとかしておこう。手続きはミュキくん任せろ。』

シオン：ーーありがとうございます。

局長『ただしー無茶はなしだ。少しでも危険を感じたら、速やかに状況を中断すること。

二年前のようなことは、二度と繰り返したくはない。――いいね。』

シオン：――そのつもりです。

ミュキ『良かったですね、先輩！』

シオン：当然の権利よ。

ミュキ『でも先輩、無事でよかったあ～ 無事なら無事って、はやく連絡くださいよお。

一時は軍から、先輩はお亡くなりになったって報告が来てたんですよ。

もう局内騒然！ 先輩、人気ありますねえ～』

シオン：また、お世辞いってもなにもでないわよ。

ミュキ『ホントですってばあ。』

アレン：あ、あの――

――僕は？

ミュキ『あら、アレンさん。そちらにいたんですか？』

アレン：いたんですかって、――僕だって、行方不明の当事者なんだから！

ミュキ『あらまあ、全然気づきませんでした。』

アレン：全然って、みんなは――？

ミュキ『別になんにも。』

アレン：――――――

ミュキ『忘れられてたんじゃないですかあ？ アレンさん、存在感薄いから。

でも良かったですねえ、アレンさんも一応無事で。』

アレン：ありがとう――最高に元気づけられたよ。――はあ。

シオン：つまらない話はその辺にして。

ミュキ『――すみません。

とにかく、先輩たちがクーカイ・ファウンデーションへ、社命で出向してるように、
帳尻はあわせときますね。』

シオン：ハッキングじゃなくて、正規の手続き踏むのよ。

ミュキ『ええ、めんどくさいなあ～』

シオン：ごめん、通信入ってるから。あとよろしくね――

ミュキ『は～い――』

Jr.『通信中、悪いな。』

シオン：ううん、用件は終わってたから。

Jr.『そっか。ちょっと見せたいものがあてね。隔離格納庫まで来てくれないか?』

シオン：え、ええ、わかったわ。

Jr.『ああ、じゃ待ってるぜ。』

アレン：いったい、なんでしょうね?

シオン：まあ、行ってみればわかるわよ。

隔離格納庫

シオン：――モモちゃんやジギーさんも、みんな呼ばれてたんですね。

モモ：ええ、でも――

ここ――なんでしょう? とても嚴重なコンディション調整を感じますけど――

シオン：大きな箱――橋の左右に6つずつ、向こうに1つ――

ジギー：全部で13――それぞれのブロックに、名前がついているようだな。

シオン：目、いいんですね。

どれどれ――ペトロ、アンデレ、ポアネルゲ、トマス、ヨハネ、ええと――

KOS-MOS：フィリポ、マタイ、バルトロマイ、ヤコブ、タダイ、シモン、ユダ――

シオン：後は――

KOS-MOS：マリーエンキントと記されているようです。

シオン：マリーエンキント――どこかで聞いたことあるような――

シェリィ：”マリアの子供”という意味よ。

Jr.：ここは、見るのもヤバいような物を入れるところさ。こういったな――

シオン：ゾハル――!

Jr.：全部、エミュレーターだけだな。昨日、回収したのも含めて、バッチリ封印済みさ。

シオン：どうして、ゾハルがここに――

Jr.：ま、商売は色々手広く。それにこの御時世、グノーシス対策は避けて通れねえからな。

連邦が重いケツを上げる前から、備えは必要だったってコト。

モモ：通路の先にも、部屋ありますね。向こうはなんですか?

Jr.：見て気持ちのいいもんじゃないぜ。

シオン：見せてくれないの?

Jr.：やめとけよ、お薦めしない。

シオン：手広く商売といっても、一財団でしょ。

この艦の武装にしたって、戦術強襲艦を遥かに上回る物が装備されているみたいだし――
あなたたちって、いったい――

Jr.：元は政府の機関なんだけどね、一応。ま、いいか――

そんなに见たいなら、ど一ぞ。あんたたちももう、深く関わっちまってるんだしな。

シオン：なに――かしら？

――っ！

Jr.：言っただろ、お薦めしねーって。

KOS-MOS：ここにあるものはすべて、人間のグノーシス変容体のようです。

ジギー：変容体――話には聞いていたが――

Jr.：グノーシスに接触すると、大抵は白化して砕けちまうんだがな。ごく稀にこんなこともある。

シオン：――

Jr.：俺たちはこの子を仮に、ベティって呼んでる。直視するのはキツイだろ。

――でも、コードや番号で呼びたかないんだ。

死人を”モノ”や”数”として見るようになったら、お終いだからな。

モモ：女性――ですか？

Jr.：最後に見た時は”女の子”だったよ。

アレン：人間がグノーシスになるなんて――やつらの正体って判らないの？

Jr.：捕獲されたグノーシスの残滓はたくさんあるみたいだが、正体解明の参考にはならなかった。

――その構成物質知ってるか？

アレン：いや――

Jr.：NaCl――塩さ。あの半透明の体組織だって、その主成分は水や水酸化ナトリウム。

そんな当たり前の物質が、なぜあんな存在になるのか。

奴らに接触された人間が例外なくグノーシス化するっていう事実から、

新種のウィルス説や、別次元の生物がこの世界に存在する為にとっている仮初めの姿だって説まで、玉石混淆さ。

シオン：例外は――ないの？

Jr.：ないね、俺の知る限りでは。

シオン：（――中佐も、グノーシスになる前に接触されていた

じゃあ、私も――？）

アレン：別次元の生物って可能性もあるんだよね。だとしたら、本体は別にあるってことー？

Jr.：どうだかな。ま、人間に対して敵意を持っていることだけは確かさ。

もっとも、人間に敵意を持つ存在なんて、珍しいけどな。

アレン：ん？ 主任、どうかしたんですか？ ー顔色悪いですよ。

シオン：なんでもないわーなんでもー

い、いつからこんなことが始まったのかしらー？

Jr.：非公式には、ここ数百年、それらしい現象は散逸的にあったらしい。

けど、ある事件を境にして、グノーシスは歴史の表舞台へ飛び出したー

モモ：ーある事件ー

Jr.：ミルチア紛争。

シオン：ー！

Jr.：開いてはいけない扉を開いた男、ヨアキム・ミズラヒの野心が、災いをこの世へ解き放ったー

シオン：ヨアキム・ミズラヒー稀代の科学者にして、U-TIC 機関創設の祖ー

Jr.：狂人さ。グノーシスへの知的好奇心を抑えきれず奴らと呼ば寄せたんだからな。

モモ：ー狂人ー

（パパはーそんな人じゃないー）

Jr.：ファウンデーションは、その後始末と事実究明のために、

戦後、遷都した第二ミルチア政府が音頭をとって設立された。

それが俺たちの本来の仕事さ。しかし、ここ数年は平和そのもの。

かといってファウンデーションの維持、特にゾハルの管理には莫大な金がかかる。

そんなこんなで財団化、その後に一部門を民営化したらサイドビジネスで大当たりってわけー

シオン：（モモちゃんー）

ー

モモ：狂人ヨアキム・ミズラヒーパパは本当に、そんな人なのかしら。

パパに創られた私たちレアリエンも、有害なモノなのかなーあなたたちはどう思うー？

シオン：モモちゃんーこんなところにいたんだ。

モモ：シオンさんー

シオン：どうしたの？ 元気ないなあ。

モモ：シオンさんーモモはーヨアキム・ミズラヒに創られたんです。

まだ連邦に貢献していた頃に計画された百式レアリエン――

シオン：――知ってるわ。

モモ：シオンさん、モモ――パパが狂人だとは思えない。でも――自分が何者かも判らない。

シオン：自我同一性の拡散――か。永遠の難問よね。

この艦――いい環境虫[エンヴァイラメンタル・バグ]使ってるわね。

閉塞した空間をクリーンに保つナノマシン。これ、ミズラヒ博士の――ううん、
科学の歴史の中でもけっこういい発明だと思うな。

この子たちは、人工的に生み出された存在なのに、ずっとこの世界にいたように役に立ってる。

あなたたちレアリエンも、同じじゃないかな。

人間と違うのは、誕生してからの歴史の長さだけ。

この世界全体を構成する、大事な要素[メンバー]であることに変わりはないと思うんだけど。

それに私――ミズラヒ博士が一般に言われているような、危険な人物だったのかは疑問なんだ。

環境虫だけじゃない。彼のレアリエンに関する著作は、深い洞察に満ちているもの。

KOS-MOS：現在の対グノーシス技術の発展にも、ミズラヒ博士の遺したグノーシス基礎研究が役立っています。

シオン：ナイスフォローね、KOS-MOS！ 今の反応、すごく良かったわ。

感情の共感[エンパシー]――人間関係にとっても重要な要素[ファクター]よ。

KOS-MOS：現在は人間関係の円滑化が必要とされる場面[フェーズ]ではないと思われますが、
お役に立てたのなら幸いです。

モモ：ふふふ、KOS-MOSさんって面白い人ですね。

シオン：人の言うこと、あまり聞かない子だけどね。

モモ：パパに会ったことはないんです。でも、モモが生まれるまでの間、ずっと優しく声をかけてくれてた。

『善い行いをしたら、モモは人間になれるよ』って――

ぼんやりとだけど、それだけは――

シオン：そう、素敵な思い出ね――

モモ：はい！

――――あ！

あの光――自由軌道型コロニーです！

シオン：じゃあ、あれがクーカイ・ファウンダーションね――

KOS-MOS：その通りです。

シオン：あれが、この艦の目的地――

- 

??? 『――最後のエミュレーターが、クーカイ・ファウンデーションの手に落ちたようだな。』

マーグリス：確認されたわけではありませんが、状況から推測して、その可能性がもっとも高いことは事実です。

??? 『オリジナルへ至る鍵と、すべてのエミュレーター。

それらが、一箇所に集められたことになるわけだ。』

マーグリス：総帥を失望させるような事態には、至らないでしょう。そのための U-TIC 機関です。

??? 『そう願いたいものだな。マーグリス、私の信頼――裏切るでないぞ。』

マーグリス：は――――

ペレグリー：やはりプラン 401 を発動させるのね。

マーグリス：――穏便な手段だ。貴様にとっても、その方が良心を痛めずにすむのだろう。

ペレグリー：手段を選ぶ余裕があるのは、望ましいことのはずよ。

マーグリス：たしかにな。

ペレグリー：――ご希望の異端審問官を連れてきている。顔ぐらいは見えておいて。

マーグリス：ああ、通せ。

ヘルマン：ヘルマン異端審問官であります。司令にお目通りかないまして、光栄であります。

リヒャルト：――リヒャルト。お役に立って、ご覧にいれましょう。

ペレグリー：二人とも、例の因子を持っているわ。

マーグリス：ほう、ならば働き次第によっては E.S. を駆ることもあろう。励むがよい。

――では行け。吉報のみを待つとする。

ヘルマン：はっ、司令の命ずるままに。

リヒャルト：ご期待に応えて、見せましょう。

ペレグリー：後は議会工作ね。

マーグリス：そちらは、老人に期待してよかろう。セラーズにも、依存はないはずだ。伝えておいてくれ。

ペレグリー：――了解。

（手段を選ぶ余裕、か――

機関を変質させていくことは、手段であって、目的ではないはず

信じてよいのだな、司令――――）

